

掲載コンテンツ紹介

平成 17 年度に全国から応募されました地域文化資産映像を、審査委員会にて分野別・地域別を考慮し厳正なる審査を行いました結果、100 本の地域映像が選定されました。

以下に 100 本の地域映像の概要をご紹介します。実際の映像は平成 18 年 4 月公開の「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業ポータルサイト」にてご覧頂けます。

(平成 18 年 3 月 31 日までに合併予定の市町村については合併後の市町村名を記載しています)



北海道 帯広市 神々とともに 帯広カムイトウウポポ保存会の歌と踊り

ご紹介する映像は、国の重要無形文化財に指定されているアイヌ古式舞踊です。演ずるのは、アイヌ文化の保存伝承活動に取り組んでいる「帯広カムイトウウポポ保存会」の皆さんです。北海道に先住していたアイヌの人たちは、独自のアイヌ語をもち、口承文芸や伝統的儀礼、衣食住など、特有のアイヌ文化を築いてきました。アイヌの人たちの歌や踊りは、神々への祈りを表したものや豊漁彌を祈願するもの労働の様子や動物の動きを表したものなどさまざまありますが、この映像を通して、今では希少となっているアイヌの生活文化に触れ、理解を深める一助となれば幸いです。



青森県 黒石市 上十川獅子踊 黒石よされ元踊

上十川獅子踊は、毎年旧暦 4 月 8 日に長谷沢神社で獅子起こしを行い、8 月 14 日に上十川八幡宮の祭礼の宵宮に奉納、旧暦 8 月 15 日に上十川八幡宮で行われる獅子納めに踊られています。各種祝い事でも頼まれて、演じています。この作品には、「街道渡り」、「女獅子競い」、「山掛け」、「十五夜」など 8 演目が収録されています。黒石よされ元踊は、毎年 8 月に行われる日本三大流し踊り「黒石よされ」の基礎になっている古式の踊りです。動きが不明になることがないように、できるだけ全体を記録するように配慮をしています。現在の流し踊りも撮影し、その変化がわかるようにしてあります。



青森県 東通村 民俗芸能の里 東通

本州の最果て、青森県下北郡東通村には 29 の集落が点在し、村人の生活に深い関わりを持って、民俗芸能を豊かに伝承してきました。芸能は集落を守る神に奉仕するものであるとともに、厳しい冬の寒さと雪に閉ざされた人々の心を、暖かく育んでくれたことでしょう。本編においては、能舞(平成元年国指定)、神楽(昭和 55 年青森県指定)、獅子舞(平成 3 年青森県指定)、田植えもちつき踊り(昭和 62 年青森県指定)と 4 種類の無形民俗文化財を収録しています。能舞、神楽、獅子舞は集落の祭りと正月に、田植えもちつき踊りは小正月に演じられます。



岩手県 久慈市 久慈市郷土芸能祭

久慈市郷土芸能祭は、久慈市に伝わる郷土芸能の保存伝承を図るために隔年で開催されています。平成 16 年 2 月 1 日に行われました郷土芸能祭には、細野念仏剣舞、小袖漁撈唄、大芦しゃくし舞、生平駒踊り、山根神楽、夏井大梵天神楽など、久慈市に伝承されている郷土芸能が披露されました。



岩手県 奥州市(旧江刺市) 江刺の鹿踊 岩手県江刺市 鹿踊の記録

岩手県に伝わる鹿踊りは大別して「幕踊系」と「太鼓踊系」の 2 種類ですが、江刺の鹿踊りは太鼓踊系の流れをくんでいます。太鼓系鹿踊りの特徴は、長い腰指し(ささら)を付け、締め太鼓をダイナミックに打ち鳴らし、自らが唱える念仏調の踊り歌にのって勇壮に舞うというものです。八頭立てで群れをつくり踊ることから「八つ鹿踊り」とも呼ばれています。八つ鹿踊りは大きく行山流、金津流、春日流の三流派に分かれ、三つの流派のうち行山流が最も古い流派で、金津流や春日流は行山流から分派した流派だと言われています。現在では江刺市内に 15 の鹿踊り組があり、これらは行山流と金津流に大別されます。



宮城県 仙台市 仙台の祭礼

仙台は慶長年間に伊達政宗によって造られた東北を代表する都市です。この都市計画は 400 年が経過した今も生き続けていて、現在の市街地の景観も江戸時代の町割をもとに発展したものです。現在の仙台にはさまざまな祭礼や年中行事が息づいています。仙台七夕や大崎八幡宮例祭、どんと祭などのように、江戸時代から伝統を持つもの他にも、光のページェントやみちの(YOSAKOI)のように、現代の都市祭礼として新たに生まれたものもあり、仙台の四季にいつもの彩りを加えています。



宮城県 丸森町 神々が舞う伊具の里 蔵王山伏神楽

丸森町大内に古くから伝承されてきた修験神楽の紹介です。言い伝えによると、今から1200年前の昔、出羽の国鳥海山で修験道の高祖役小角(えんのおづぬ)が、国家安泰、五穀豊穰、諸病退散を祈願し始めたものといわれています。室町時代に諸病退散のために当地に伝承されたといわれ、正月14日の厄払い祈禱に依頼され民家の座敷で舞われています。その実際の現場で密着取材し、神楽の由来や舞の内容と、それらを支えてきた修験(山伏)と村人の人たちとの関わりを紹介したものです。



秋田県 秋田市 土崎神明社祭の曳山行事

土崎神明社祭の曳山行事は、港土崎の鎮守・土崎神明社の例祭として古くから伝えられてきた行事です。古式ゆかしい神事とともに、勇壮な曳山が町内を練り歩く夏の祭りです。7月20日、21日の両日、秋田の夏を熱く彩ります。国の重要無形民俗文化財に指定されているのは、二日間の祭りだけではなく、様々な神事、曳山を奉納する町内の準備作業など祭りに関するすべてです。厳粛に、勇壮に、華やかに練り広げられてきたこの祭りは、人々が自然の恵みや安らかな日々暮らしを神に感謝し、地域全体が一つの輪となって、多くの困難を克服し地域の発展を願ってきた歴史といえると思います。



秋田県 横手市(旧増田町) 戸波の郷土芸能

戸波郷土芸能保存会では、戸波地区に伝わる「ぎおんばやし」「きつねばやし」「草音頭」の保存・継承に努めています。「ぎおんばやし」「きつねばやし」は、元禄期の頃に加賀国の浪人、千鳥(対馬?)監物から教えられたものと云われ、戸波村の鎮守・薬師堂の再建を祝ってふたつの踊りが披露されたのが同芸能の始まりと考えられています。以降、明治末期まで同堂で、その後は村の広場に仮設舞台を設置して奉納されました。「草音頭」は、戸波村の念仏踊りが起源と云われています。その後戸波でも盆踊りが行われるようになると、この踊りが盆踊りとして踊られるようになりました。昭和10年頃に一旦中止されましたが、同17年、先祖供養・戦意高揚・先勝祈願などを趣旨として、皆瀬川原で復活しました。



秋田県 男鹿市 男鹿のナマハゲ

男鹿のナマハゲは、毎年12月31日の晩、赤鬼・青鬼に扮した若者が村々の家を廻り歩き、怠け者をこらしめ、災禍をばらい、家内安全・大漁豊作をもたらす行事として伝承されてきました。このいわれは諸説ありますが、その昔、漢の武帝が5匹の鬼を従えて男鹿に上陸し、男鹿三山に住み、里に下って恐れられたのがはじまりとも言われています。年の折り目に神が来臨し、人々に祝福を与える行事は全国的に分布しますが、「男鹿のナマハゲ」ほど古態をとどめ、かつ濃密な分布を示すものは少ないです。わが国古来の民間信仰の一典型例として、昭和53年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。



山形県 鶴岡市 三森山のモリ供養

山形県の日本海側に位置する庄内地方では、モリあるいはモリの山と呼ばれる、里にほど近い山やこんもり茂った森などに死者の霊がとどまると考えられています。鶴岡市の清水にある三森山も庄内におけるその信仰拠点の一つで、毎年旧盆あけの8月22日、23日に花や供物などを持参して、山上にある諸堂を巡拝するなどして、有縁・無縁の死者の供養を行う習俗です。盆で送られた霊はモリに集まり、そこで供養され、やがては月山や鳥海山など更に高い山に行くと考えられています。これは、清水のモリ供養を記録したものです。



山形県 上山市 とんと昔 ~ 榎下宿佐藤家の昔話 ~

太古からの人々の営み、喜怒哀楽を伝えてきた語りの部の末裔(佐藤孝一)が羽川街道の宿場町で知られる榎下に住んでいます。佐藤家の先祖は宮中の語り部でしたが、大陸から文字が入って文書が中心になり、都落ちして榎下に住むようになりました。語り部は、祖父から孫(長男)へ隔世で伝えられるのが習わしで、孝一氏も物心がつく頃から話を教え込まれ、今でも千余りの話を立ち所に話することができます。民話の語りには、一定の型があり、孝一氏は「とんと昔あったはずな」と話し始めて「どんびんからりん」で終わる型をとっています。民話は人情豊かで郷土に根ざしたものです。語り継がれてきた背景には、民話というメッセージがいつの時代にも共通しています。語り継がれてきた民話は、佐藤孝一氏によって懐かしさとあたたかみのある民話として蘇りました。



山形県 西川町 岩根沢太々神楽

岩根沢太々神楽は、明治初年頃に福島県伊達地方に伝わる里神楽がこの地方に伝えられたと言われています。すべてが神話を題材とする神々に扮し、神々を象徴する面を付けます。通常は三座での奉納となり、「猿田彦神」は国津神の中で一番偉い神とされている天狗が天孫降臨に際して道案内をする所を演じ、「倭姫舞」は女性を演じ全体的に緩やかな舞となります。また、「宇賀舞」は、狐が舞い全体的に軽快なテンポで、最後に菓子に乗せた三宝を持って菓子を撒きます。これは農産物の種蒔きの場面で被い清めた所に種を蒔き五穀豊穰を願うものです。昭和51年に神楽の復興と後継者育成の目的で、岩根沢太々神楽保存会が結成され保存育成に努めています。



福島県 二本松市 石井の七福神と田植踊り ~ 二本松市 ~

本芸能は、福島県二本松市の旧石井村に伝承されていて、もとは旧暦の小正月に集落の家々を巡って行われていました。その年の稲作や養蚕の豊穰を祈り、主に踊りの形で稲作過程を演じて祝う東北地方特有の田植踊りの一つです。これに先立って舞い込むのが七福神であり、この点に地方的特色が著しく、我が国予祝芸能の一類として特徴があり、貴重なため、平成7年12月26日に国の重要無形民俗文化財に指定されました。



福島県 ^{にほんまつし いわしろまち ひろせくまのじんじゃ みたうえ}
二本松市(旧岩代町) 広瀬熊野神社の御田植

広瀬熊野神社の御田植祭は、福島県二本松市街から東に約20km、阿武隈川の支流である広瀬川を溯った上太田字広瀬地区に伝わるものです。御田植祭は、豊年の予祝と作占いの田遊びが伝えられており、まだ土の香りが残る素朴の上ない芸能です。祖先から、この行事をとおして、ひたすら豊作を祈願し、地域民が互いに助けあひあひ、幾多の辛苦を乗り越えながら、生活向上のために伝承されてきました。この祭礼当日は女人禁制に加え、終了後もたとえ肉親であろうと神事の一切は他言無用の不文律があり、古い形態がよく保持されている民俗芸能です。



福島県 ^{みなみそうまし はらまちし そうまのまあい}
南相馬市(旧原町市) 相馬野馬追

伝説では、相馬氏の祖、平将門が下総国小金原に放した野馬を追って武装を練ったことに始まるといわれています。現在は、相馬太田神社(原町市)、相馬中村神社(相馬市)、相馬小高神社(小高町)の合同祭礼として行われています。祭礼は3日間に及び、7月23日は出陣と宵乗り、24日は騎馬500騎が参加する行列・神旗争奪戦、小高の火祭り、最終日の25日は相馬小高神社の野馬懸が行われます。相馬野馬追は、往時の放牧が盛んであった時代の風習をもとに武士姿の騎馬戦による競技で、当地方の民俗をよく反映しています。特に野馬懸はわが国民の基盤的な生活文化の特色を示すものとして価値があります。



茨城県 ^{こがし そうわまち あなぬま}
古河市(旧総和町) 女沼のささら

女沼のささら(獅子舞)は、毎年11月中旬に女沼の香取神社秋季大祭に境内で奉納されます。この獅子舞は「太夫獅子」「女獅子」「後獅子」の3頭からなる風流獅子舞で、紺の上着に袴を着け、草履を履き、獅子頭をかぶり、腹に小太鼓を付け打ち鳴らして舞います。境内には万灯が立てられ、笛の吹き手と花笠をかぶる者が加わります。袴と草履の着用が許されたのは、寛永11年(1634)日光東照宮造営の地固めで見事な舞を披露したことに始まるといわれています。戦争などで一時衰退しましたが再興され、現在は女沼ささら保存会により保存伝承がなされています。舞は「平にわ」「へびかがり」など12幕ありますが、現在は10幕が演じられます(古河市指定無形民俗文化財)。



茨城県 ^{さくらがわし まかべまち ごしよこまがたきじんじゃ さいじ ぎおんさい せわにんせいど}
桜川市(旧真壁町) 五所駒瀧神社の祭事 ~ 祇園祭と世話人制度 ~

7月23日から26日に行われている五所駒瀧神社(桜川市真壁町山尾)の夏祭りは、約400年前、江戸時代初期に町年寄が京の祇園祭にならってはじめてといわれています。神社の祭事の中心は「世話人制度」とよばれる、世話人、中老、大老、という序列組織によって運営されます。氏子である高上町、仲町、上宿町、新宿町、下宿町の5地区(現在は4地区)にはそれぞれ4人ずつ世話人がおり、かんかん帽に黒の羽織、白足袋が世話人の装束のきまりで、祭の協議の進行や、神輿や山車の運行、引き継ぎなど、しきたりはきびしく、古式のまま継承されています。昭和61年(1986)国記録作成選択無形文化財に選択。



栃木県 ^{かぬまし とちくぼ てんねんぶつ}
鹿沼市 栃窪の天念仏

天念仏(天祭)と呼ばれる祭礼行事は、風雨順調・五穀豊穰を願う農民信仰を根源とし、かつては北関東を中心に広く盛行しました。一説に安永9年(1780)木喰上人により伝えられたといわれるこの栃窪でも4年に1度、旧暦4月7~9日の3日間行われていました。行事はまず沢で身を清めた白装束の行人4人が、会場に上つらえた天棚(二階建彫刻付き山)の2階に祭壇を設けて上がり、神仏を勧請して般若心経や呪文を唱えます。その後、お囃子にあわせ行人が小精進(助行人)の若者たちと天棚周囲を念仏を唱えつつ廻ります。これを1日数回繰返して行い、行道の始めと終わりに「歌念仏」を演奏します。最終日には「梵天(幣束)」を神社にあげて全ての行事を終わります。



栃木県 ^{かぬまし ちようこくやたい ささ やたいしゅうふく きろく}
鹿沼市 彫刻屋台を支えるわざ ~ 屋台修復の記録 ~

平成15年に国の無形民俗文化財に指定された「鹿沼今宮神社祭の屋台行事」。毎年10月の第2土曜日に行われるその祭礼の中で、ひときわ目を惹くのが、きらびやかな彩色屋台と重厚感あふれる白木屋台の曳行姿です。江戸時代に作られたこれらの彫刻屋台(市有形文化財)は日光の社寺建造物の影響を大きく受けていると言われ、その制作には大工・車屋・彫物師・塗師・彩色師・鋳師など様々な職人が関わりました。現在でも屋台の修復や新調の際には、これらの技術を受け継ぐ職人たちが腕を振るい祭りは現代まで続いてきています。この映像では、屋台の修復の過程を記録するとともに、それらの職人の技術について紹介していきます。



栃木県 ^{なすまち なすまち きようどげいのう はんびよう かんねんぶつ}
那須町 那須町の郷土芸能 半俵の寒念仏

半俵の寒念仏は、義経と弁慶の伝説にまつわる念仏踊りです。鎌倉時代に源頼朝の追討をのがれ奥州へ下る義経、弁慶など12名の主従が一夜をこの地の半俵(阿久戸)の岩穴で明かした縁で、その霊を弔うために生まれたといわれています。現在では、五穀豊穰、家内安全、商売繁盛の祈願に変容しており年に2回、寒の入り(1月)と夏の土用(7月)に念仏を踊ります。子供たちにも分かりやすくするため、切り絵を使用したり、一部物語風に仕上げました。なお、継承される伝統芸能の影で、ささえる地域の人々の苦勞を伝える作品としました。



群馬県 ^{ぬまたし おぎょん ぬまたぎおんまつり}
沼田市 おぎょん 沼田祇園祭

関東の最北端群馬県沼田市。毎年8月3~5日灼熱の夏の日差しにも負けじと熱く燃える祭「おぎょん」、古くからこの土地の人々は「ぎおん」「おぎょん」と呼びます。正しくは祇園祭で崇敬と親愛の情をこめ「お祇園祭り」から「おぎょん」となりました。神社の神輿が市街地を渡御し、それを華美壮麗な山車が囃し立てる、江戸の天下まつりを偲ばせる一大絵巻が繰り広げられます。沼田祇園囃子は上州系統の「さんてこ囃子」で、締太鼓の音を高く調律させて、叩くときの強弱をハッキリさせる伝統の奏法と、能管に似た長尺太笛が中核に位置して、高尚な響きに仕上げ、総じてテンポがゆっくりで、気品を醸した荘重典雅な趣の祭囃子です。



群馬県 ^{たてばやしし} 館林市 ^{おおしまおかざとかみよかぐら} 大島岡里神代神楽

岡里神代神楽は、栃木県佐野市飯田(現佐野市飯田町)より伝承されたといわれ、最初は、飯田地区近辺の神主によって奉納されていたが、明治初年、里人に受け継がれ、民間芸能として定着し、現在も地域で継承されています。当神楽は「戸ヶ崎流」と称し、古風な格調高い形式を保ち、演目も「翁」「児屋根」「戸隠」「細女」をはじめ12座に及び、近世初期に興った岩戸神楽の流れをくみつつ、江戸神楽・神代神楽の一典型として貴重な存在となっています。当映像記録は、平成5年4月11日に行われた奉納の様子を記録したものです。演目は、「幣舞式者」「翁」「児屋根」「細女」「戸隠」「天狗」「金山」「恵比寿」「狐」の9座です。



埼玉県 ^{かわごえし} 川越市 ^{かわごえ} 川越まつり

川越まつりは、今から350年ほど前、当時の川越藩主松平信綱が、川越氷川神社に神輿や獅子頭などの祭礼用具を寄進し、祭を奨励したことに始まります。川越は、江戸に最も近い城下町であり、新河岸川の舟運などを通じて物資や人を運び、江戸とは緊密な関係にありました。川越まつりは、天下祭とよばれた赤坂山王祭・神田祭の影響を強く受けて発展してきました。江戸の祭の華を現在の川越まつりのなかに見ることができます。平成17年2月21日には、「川越氷川祭の山車行事」として、国の重要無形民俗文化財に指定されました。この作品は平成12年度の作品です。川越まつりの歴史や氷川神社の祭事、町衆に受け継がれている民俗などが描かれています。



埼玉県 ^{つるがしまし} 鶴ヶ島市 ^{すねおりあまごい} 脚折雨乞 ^{いま い} ~今に生きる先人の知恵~ ^{せんじん ちえ}

埼玉県鶴ヶ島市の脚折地区に伝わる「脚折雨乞」は、江戸時代から伝わる雨乞いの行事で、その大きな特徴は、竹と麦ワラで長さ36m、重さ約3tの「龍蛇」と呼ばれる蛇体をつくって降雨を祈願することです。この龍蛇は、白鬚神社の宮司により「龍神」と呼ばれますが、約300人の男がこの龍神を担ぎ、「雨降れたんじゃく、ここに懸かれ黒雲」と叫びつつ、神社から「雷電池」までの約2Kmの行程を練り歩きます。池の中で雨乞いをした後、最後に蛇体を解体しますが、これは聖地である雷電池を汚すことで、天にいとされる龍神を激怒させ、その怒りで雨を降らせてもらうとされています。元々は、旱魃の年にのみ不定期に行われていましたが、現在では、4年に1度、オリンピックが開催される年の8月第一日曜日に行われています。



埼玉県 ^{みさとまち} 美里町 ^{いのまた ひゃくはつとう} 猪俣の百八燈 - ^{みさと} 美里の ^{ぼんぎょうじ} 盆行事 -

8月15日に堂前山(大字猪俣)の尾根に築かれた百八基の塚に灯をともし盛大な行事です。地元では、武蔵七党のひとつ猪俣党の棟梁猪俣小平六範綱およびその一族の霊を慰めるともつたえられています。この行事は、各地で行われる盆の百八燈行事の中でも、百八の塚を築いたその上で火を焚く点で異色であり、亡霊を慰めるといふ趣意と相まって塚信仰の様相をよく示しています。



千葉県 ^{あさひし} 旭市(旧干潟町) ^{ひかたまち} 熊野神社 ^{くまのじんじやしきねんじんこうさい} 式年神幸祭

12年に一度、卯年毎に開催される祭礼です。総勢数千人に及び行列を従え、3日間にわたり御神体である御神輿が番所を巡ります。殿様、使者をはじめとする大名行列や芸能奉納が各地区の氏子たちによって披露されます。クライマックスは三川浜への「御浜下り」、太平洋の荒波に神輿がもまれる様子が圧巻です。



千葉県 ^{やちよし} 八千代市 ^{むらのバリア・ツジギリ} ムラのバリア・ツジギリ - ^{やちよ} 八千代の ^{つじぎ} 辻切り行事 - ^{ぎょうじ}

自分たちの住む地区を疫病や災厄から防ぐため境にツジギリと称したものを設置しました。その形式は各地区で独自の形式がとられ特色が表れています。その形式も都市化の波により、中断や廃止し減少する傾向があり、現行は8地区となり、それらの実態を後世に残すため、最近廃止したが映像が残っていた1地区を加えた9地区の映像による記録保存を行いました。形式も藁蛇形・しめ縄形やお札も神道・仏教形式とマチマチですが、追い払うだけの形式は一致しています。また、都市化の中では周辺住民に理解されることが重要で、その意味で多くの人々に周知啓発するために制作したものです。



千葉県 ^{しろいし} 白井市 ^{とうかついんばだいしこう} 東葛印旛大師講 - ^{しろいしひらつかちくけちがん} 白井市平塚地区結願 -

この映像記録は、平成16年5月に行われた「東葛印旛大師講」の様態を撮影したものです。行事の行われ方を中心に、行事最大の特色であり、最も賑やかな「結願」の様子等を収録しています。この講は江戸時代末期の文政5年(1822)に成立したとされ、四国霊場を模した八十八ヶ所の札所を巡る行事として実施されます。巡拝は毎年5月1日から5日迄の期間に行われ、各札所では般若心経や大師宝号等が参加者により唱和されます。全ての札所を巡り、最終日に初日に出発した札所に戻ってくることを「結願」といいます。その際には稚児行列も加わり、行事の最後を飾るべく華やかな雰囲気の中で結願場所までの練込みが行われます。



東京都 ^{えどがわく} 江戸川区 ^{えどがわゆうほ} 江戸川遊歩 ^{たんぼうめいさつかわい} 探訪名刹界限

この作品では、関東三聖天の一つとして名高い墨東屈指の名刹、平井聖天(燈明寺)の山伏による火祭り行事(柴燈護摩)の様態を紹介しています。この行事は毎年2月3日に行なわれ、毎年多くの参加者を集め燈明寺の恒例行事となっています。また江戸川区平井の魅力ある街並みを紹介します。



東京都 瑞穂町 箱根ヶ崎獅子舞

箱根ヶ崎獅子舞の由来は、つまびらかではないが、明治26年、山田範録(半六)の再生記によると、江戸時代には盛んでしたが、元治元年(1864)幕末の世情騒然たる時期に一時中止となったものを明治のなかばに再興について有志にはかり、賛成を得て「明治の再生」となったといえます。明治26年10月13日、鎮守の臨時祭礼を執行し獅子舞を奉納しました。以来、大正時代にも、狭山神社の祭礼や加藤神社の祭礼にも奉納しました。箱根ヶ崎の人々は獅子舞を奉納することによって五穀豊穡や雨乞い、家内安全を祈願してきました。昭和44年に保存会が結成され、昭和47年3月に町指定無形民俗文化財に指定され、町の伝統芸能として大切にされています。



神奈川県 川崎市 川崎の三匹獅子舞

神社や寺院などに奉納される獅子舞には、二つの形式があります。二人以上の人間が獅子に扮して舞う「一人立ち獅子舞」と、一人の人間が獅子頭を被って舞う「一人立ち獅子舞」です。一人立ち獅子舞のうち、雄獅子2頭と雌獅子1頭が一組となって演じられるものを三匹獅子舞と呼びます。川崎市では、この一人立ち形式の三匹獅子舞が現在も三か所て伝承されています。この映像記録は、川崎市の文化財として指定された三か所の獅子舞-小向の獅子舞(幸区小向西/八幡神社)、菅の獅子舞(多摩区菅北浦/薬師堂)、初山の獅子舞(宮前区菅生/菅生神社)について、それぞれの特徴などを踏まえながら紹介しています。



神奈川県 山北町 世附の百万遍念仏

約600年前から伝承されているという念仏信仰で、以前は神奈川県山北町世附の能安寺で行われていましたが、三保ダム建設に伴い、現在では同町向原に移転された能安寺で毎年2月15日に近い土・日曜日に行われています。世附の百万遍念仏は、大数珠を巨大な滑車に取り付け、屈強な青年達が回転させるもので、全国的にも珍しい行法です。長さ約9mにも及ぶ大数珠を、梯子のような枠の滑車にかけ、その側に太鼓を並べます。また、小机を据えて算木を置き、数取りをする古老が数珠の回転数を数えます。それを取り囲むように念仏衆が念仏を唱えます。念仏が終ると、獅子舞や遊び神楽が行われます。



新潟県 長岡市(旧寺泊町) 寺泊の伝統芸能 塩たき節 萬歳の若水 越後追分

近世の北前船航路の港町として栄えた新潟県寺泊町。当時の寺泊には物資や人の動きと共に様々な文化がもたらされ、この地に根付いていきました。「塩たき節」「萬歳の若水」「越後追分」は、その頃の面影を今に伝える貴重な民謡です。当時盛りを見せた寺泊の花柳界で育まれたこれらの民謡には、どこなく哀愁が漂い、その優雅さと気品からは当時の寺泊花柳界の粋を見るようです。本作品は戦後の寺泊の花柳界を代表する名コンビであり、事実上最後の寺泊芸者となった月子・千代栄両師匠が監修を行い、各民謡の解説に合わせて、それらの文化を育んだ近世の日本海交易や街道の姿に迫ったドキュメンタリー映像です。



新潟県 長岡市(旧小国町) 伝統の小国和紙

新潟県の南西に位置する長岡市小国町は300年以上の歴史を持つ県内有数の和紙の産地です。小国和紙の製造過程は楮の栽培から始まって、芽欠き作業、刈入れ、楮蒸し、皮むき、紙たたきなど多くの工程を経て製品になります。ここでは小国和紙ができるまでの過程を紹介しています。和紙は古くは日常の帳面や書道用、障子紙、行燈や花火、凧などに使われてきました。小国和紙の持つ美しさ、強靭さ、柔らかさは数少ない伝統民芸紙として親しまれています。今では高級な紙として、酒のレッテル、包装紙、絵画、壁紙などに利用されています。雪を利用した技法は、昭和48年に国の無形文化財選択記録に指定され、昭和49年に県の無形文化財に指定されました。現在、小国和紙は2軒のみで渡かれ伝統を受け継いでいます。その伝統技法を受け継いで、純粋100%の和紙をすいている紙すき職人の技法を紹介しています。



新潟県 糸魚川市 白山神社春季大祭 新潟県能生町

能生白山神社春季大祭は、室町時代の永享年間(15世紀中頃)にすでにその存在が認められる大変歴史のある祭です。地元はもとより県内外から多くの人々が足を運びます。稚児を選ぶ段階から祭礼が終了するまでに数多くの行事や仕来りがあり、その一つ一つに深い歴史と意義が含まれています。国指定文化財の舞楽は12あり、中でも最後の陵王の舞は日本海に沈む夕日をバックに勇壮に舞われ、祭も最大の盛り上がりを見せます。



新潟県 朝日村 野の芸術家たち 大須戸能

大須戸能は、新潟県朝日村大須戸集落に伝わる民俗芸能の能楽で、山形県黒川能の流れを受け継いでいます。中央の五流とは違った舞台芸術の様式・技法を特殊に発達させた芸能です。「観世大内がかり黒川流大須戸能」大須戸能の由来は、弘化元年の冬、庄内の黒川能役者蛸井甚助が当地の庄屋中山と惣右衛門家に逗留して、伝授したのが始まりといわれています。その後、明治、大正、昭和にかけて更に庄内黒川より師を招き、練習を重ね農民から農民に受け継がれてきた、野(百姓)の芸術でもあります。新潟県内はもとより、国立能楽堂、横浜能楽堂、アメリカ、ドイツなど海外公演も積極的に活動し、民間での国際親善交流にも推進して来ています。昨今は、若者の関心も高く会員も増加しており、益々練習に励んでいます。



富山県 砺波市 笛のしらべ太鼓の響き躍動する獅子舞

獅子舞は各集落の氏神の神振りとして行われ、砺波地方ではほとんどが秋祭りの時に催行されます。獅子の形態は、百足獅子が多くを占め、その道具や演じ方により「氷見獅子」と「砺波獅子」に大別できます。「氷見獅子」は胴幕に竹の輪が入らず、獅子の相手をするのが鳥兜をかぶった天狗で、獅子舞棒を持って激しく舞います。舞い様子から「踊り獅子」ともいわれます。「砺波獅子」は胴幕の中へ竹の輪が入ると、獅子取りは子供で、棒・長刀・太刀などの武器を持つのが特徴です。ゆったりした演目からは「にらみ獅子」ともいわれています。映像では「氷見獅子」の例として江波集落、「砺波獅子」の例として頼成下村集落を紹介しています。



富山県 南砺市(旧福野町) 福野神明社 春季祭礼 ふくの夜高祭

福野の夜高祭は、南砺市福野に鎮座する福野神明社の春の例祭に行われ、大小の行燈が町内を巡行します。5月1、2日に、浦町、御蔵町、上町、新町、辰巳町、七津屋、横町の7町で製作された行燈が、夕方から順に福野神明社に参拝した後、笛と太鼓にあわせて歌を歌いながら町内を練り回ります。2日の深夜に、各町の裁許によるジャンジャンとよばれる締め儀式が行われ、祭りの終了となります。この行事は、大型の行燈を曳き回す行事として本県を代表する祭りであり、近世後期から徐々に大型化してきた行燈製作の過程と、巡行の様態の変遷を考える上で貴重なものです。また、砺波地方に広く分布する田祭りのヨータカとの関係を知る上でも重要な祭りです。



石川県 珠洲市 揚げ浜式製塩

揚げ浜式製塩は、入浜式製塩に対応する呼称で、世界最古の製塩技術と言われています。藩政期には加賀藩の重要産業として奨励され、寛永4年(1627)には専売制が敷かれました。一時期中断があったものの、明治4年(1871)までこの制度が続きました。当域においては江戸時代以来、重要な産業でしたが、昭和34年(1959)の臨時塩業措置法により姿を消しました。角花家(能登の揚げ浜式製塩保存会)のみが幾多の困難を乗り越え、技術を伝承しています。塩田整備にはじまり、体力の消耗の激しい潮汲み、潮撒き、沼井作り、室温60度に達する釜屋での夜を徹しての作業など塩作りに係る一連の作業に伴う技術は全国唯一のものであり、極めて貴重な文化遺産です。平成4年(1992)4月8日、石川県無形民俗文化財に指定されました。



石川県 珠洲市 蛸島早船狂言

9月11日、高倉彦神社の秋祭り、神輿が夜遅く、神社に還御すると舞殿で早船狂言が始まります。合図の太鼓が鳴り、拍子木で床板を叩くと、口上人が現れ早船由来口上書を奉読します。舞台には長さ15尺(4.5m)の漆塗の船一艘とその上には、木偶人形7体が配してあります。口上が終わると出歌がうたわれ、船頭と艫取が出て掛合を演じ、船出を促して狂言は終わります。早船狂言は、いつの頃に起こったのか、はっきりしていないが、漆塗の飾早船や口碑によれば、今から約220年前と言われています。狂言の内容は絶世の美男子、長右衛門という船頭が揚屋の芸者、高尾高崎にドント打込み、水夫たちの再三のすすめにも応ぜず、一向に船を出さないで、ある日とうとう艫取と掛合になると言う場面です。平成8年9月14日石川県無形民俗文化財に指定されました。



福井県 福井市 糸崎の仏舞 古と今をつなぐ

福井市糸崎町の糸崎寺で、一年おきの4月18日に上演される国重要無形民俗文化財「糸崎の仏舞」は、大陸から渡来した奈良時代の舞楽を今に伝える貴重な伝統芸能です。仏舞は、舞鶴や隠岐など七個寺に伝わっていますが、糸崎の仏舞が最もよく伝承されているものといわれています。作品では、海を越えて渡来した仏舞のルーツを探るとともに、菩薩や天女の喜びの舞である仏舞を守り伝えてきた、糸崎のひとつひとつと自然の姿を描きます。



福井県 小浜市 若狭の夏を囃す 小浜放生祭

放生会が行われる後瀬山麓鎮座の八幡神社は、地方の大祀で鎌倉時代には鎮守大明神に列し若狭一の宮に次ぐ崇敬を受けた社です。当社中世の放生会には、管弦、流鍋馬が、近世には神事能、管弦、相撲などが奉納されました。毎年9月14、15日(平成16年度から9月の第3土日)の例大祭(放生の儀礼はないが、古来より放生会という)に奉納する出し物は、寛永15年(1638)以降、市内千種に鎮まる広嶺神社の祇園御霊会(祇園祭礼絵巻)に際し、当社の御旅所に滞在される祇園三神輿の還幸に伴って奉納されました。往時は各町内毎に笠鉦、棒振り、大太鼓、神楽、花車、曳山や数寄を凝らした仮装の行列などを練り出し、巡行に華麗な風流を競演していました。しかし明治維新後はすべて当社放生会に奉納の出し物となり、さらに明治7年(1874)の町区改編を契機として内容的にも大幅な変改を余儀なくされ、近年では大太鼓5区、山車9区、獅子舞(雲浜獅子、内容は同じ)4区、神楽5区、神輿1区の計24区に固定化し、交互隔年に12区づつ出陣して賑やかな祭囃子のなか、当社社頭及び各区の本陣等を巡行し伝統の神事芸能を演舞奉納しています。『稚狭考』はかつての祇園会巡行を評して、敦賀、長浜、大津の祭りにはじめ風流と記していますが、いまま豪華絢爛を極める若狭路最大の秋祭りとしてされています。



山梨県 北杜市(旧長坂町) 長坂町の筒粥占い 穂見諏訪十五所神社の伝統行事

武田信虎より、富士の浅間神社、地獄の金桜神社、穂見神社の三カ所に筒粥を以てその年の五穀豊凶否の神占いを命ぜられたのが始まりです。5寸ほど切った芦をすたれ状に編み、束にしてそれぞれの芦に穀物、野菜、養蚕をはじめ天災、水、風、雨、霜、雪、景気等を占う種名を決めて、5号の米、3拵の水で作った粥の中へこの芦の束を入れ2升の水を追加しながら煮詰めていきます。神社立会いのもとで芦を開き粥状になっている米の数で占うものです。



長野県 飯田市(旧上村) 信州上村の伝統芸能 中郷獅子舞 御祝い棒 事の神送り 正調絵島 下葉の掛け踊り

【中郷獅子舞】悪疫、飢饉、その他の災害を逃れるために、百獣の王といわれる獅子の太神楽舞を氏神様に奉納し、その年の安泰を祈願したと言い伝えられています。
【御祝い棒】その年に結婚した夫婦の家に子供達が男性を象徴する棒を持っていき祝う子孫繁栄・子宝祈願の行事です。
【事の神送り】現在は上町地区のみで行われており、悪疫をばい疫病神を地区から送ってしまう行事です。
【正調絵島】江戸時代の絵島事件を偲んで唄った歌と踊りで、上町はかつて秋葉街道「上町宿」として栄え盆踊り歌として受け継がれてきました。
【下葉掛け踊り】江戸時代初期に伝わったとされ、村の産土様をはじめ神仏を回る盆行事ですが、雨乞い踊りだとの解釈もあります。



長野県 清内路村 受け継がれる熱き心 二百七十年の歴史と伝統清内路手づくり花火

清内路村の手づくり花火は、西暦1731年特産の葉たばこ二百七十年の歴史と伝統清内路の行商に出かけた村人が花火製造の秘法を三河地方から入手してきたことに始まります。毎年10月に神社の奉納花火として手づくり仕掛煙火が披露されています。この手づくり花火の製法は、村人が火薬の製造や保安の免許を取り、つくり続けている伝統の技術で、原料となる木炭を作ることから始まり硝石と硫黄を混ぜ合わせ火薬をつくり、仕掛花火には、花がさ、棚火、綱火、尺車、手筒、ブドウ、大三国などの伝統花火から噴水、メリーゴーランド等の新作花火が火薬の量や割合をかえて、葡萄の房を表現したり、仕掛を回転させたり飛ばしたりする全国にも類を見ない花火として知られています。



岐阜県 高山市 桜山八幡宮例大祭

桜山八幡宮例大祭は日枝神社の例大祭である「高山祭り」のうち秋の八幡祭りです。祭りは10月9日～10日に高山市街の北半分を祭礼の区域として行なわれます。祭りの起源は古く、江戸時代の享保年間(1716～1735)には屋台が曳行されたという記録があります。見所は「動く陽明門」と形容されるほどの絢爛豪華な屋台祭りで、夜には宵祭りとして、各屋台がそれぞれ百個余りの提灯に灯を燈して曳行します。



岐阜県 高山市 日枝神社例大祭

16世紀後半から17世紀が起源とされる高山祭り。春祭りは山王祭りと呼ばれ、高山市街の南半分の氏神様として崇められる日枝神社の例祭であります。見所は「動く陽明門」と形容されるほどの絢爛豪華な屋台祭りで、夜祭りとして、各屋台がそれぞれ百個余りの提灯に灯を燈して曳行します。美しい屋台や祭りに関わる人々の姿・熱意を見て貰いたいと思います。



岐阜県 恵那市(旧山岡町) 山岡の地歌舞伎

恵那市山岡町は毎年12月の第一日曜日に、山岡歌舞伎公演を行っています。岐阜県重要無形文化財「松本団升」先生の指導のもと、小学生から大人まで幅広い年齢層で行っています。地歌舞伎ならではの笑い、涙を見ることができます。皆さんも一度見に来てはいかがでしょうか。



静岡県 三島市 三嶋大社のお田打

古代、三島には伊豆の国府が置かれ、国分寺や国分尼寺が建てられました。三嶋大社は伊豆一の宮と称され、鎌倉時代には源氏との深い関係の中で重きをなし、国府、国分寺、三嶋大社を中心として、伊豆の国の政治・産業・文化の中心地として、華やかな中世の「まち」を形成しました。「お田打」は稲作の「予祝儀礼」とされる神事芸能で、稲作の一年の初めに神前で稲作の過程を演じて、豊作を祈願するものです。「三嶋大社のお田打」は平安時代に起こり鎌倉時代に盛んに行われたようです。舞殿中央に田所を想定し、「穂長」と「福太郎」の両役を中心に演じられ、長い時代の変遷により今日の能狂言形式に定着しました。伊豆一の宮にふさわしい格式と風格を備えた民俗伝承の文化財となっています。



静岡県 島田市 島田帯祭の大名行列

静岡県指定無形民俗文化財「島田帯祭の大名行列」を、平成10年10月11日を中心とした島田大祭において撮影収録したもので、島田宿や帯祭の概要、祭りの準備から行列の紹介、本祭、本陣入りまでが、概括的に捉えられるよう構成されています。300年の歴史を誇る島田大祭(帯祭)の大名行列は、10万石の格式を模したもので、総勢約250名・全長約500メートルに及び編成となっています。中でも安産祈願の帯を木太刀に下げて優雅に練り歩く「大奴」の存在は、島田独特のもので、島田大祭は、3年に1度、寅・巳・申・亥年の10月中旬に開催されています。是非お越しください。



愛知県 豊橋市 安久美神戸神明社 鬼祭

愛知県豊橋市八町通、安久美神戸神明社の例祭「豊橋鬼まつり」は、国の平穏と豊作を祈って、毎年2月10日、11日に行われる平安時代から続く神事です。10日の前夜祭は岩戸の舞で始まり、青鬼が町内を回ります。11日の本祭は、午後2時頃より境内で神事が始まります。有名な「赤鬼と天狗のからかい」は、高天原に現れ悪戯をする荒ぶる神(赤鬼)を、武神(天狗)が懲らしめる様を田楽にしたもので、国指定重要無形民俗文化財とされています。天狗に諷刺され改心した赤鬼は、多数の警護の若者と共に厄除けの「たんきり飴」と「粉」を撒きながら氏子町内に繰出します。この粉をかぶると夏に病に掛からないと伝えられています。



愛知県 瀬戸市 陶芸 織部・黄瀬戸

「瀬戸」は、六古窯の一つで、1300年の歴史を有し、日本を代表する窯場です。そのなかで、「黄瀬戸」と「織部」は、瀬戸の施釉陶器を代表するやきものです。「黄瀬戸」は、鎌倉時代以降の灰釉の流れをくみ、黄色の色調が特徴です。又、「織部」は、安土桃山時代の武将で茶人の古田織部が、好んだ模様・形状・色調のものを美濃・瀬戸地方で作らせたもので、今までにないやきもとして大きな特徴であるといえます。「加藤伸也」は、この「黄瀬戸」と「織部」の伝統を継承しながら、独自の作品の制作に意欲を注ぎ、現代社会にも、マッチする作品を制作しつつ、その作品からは、落ち着いた風格を醸し出しています。「加藤伸也」は、平成16年8月20日に愛知県指定無形文化財「陶芸 織部・黄瀬戸」の保持者として愛知県から認定されました。



愛知県 犬山市 尾張富士大宮浅間神社 石上げ祭

愛知県犬山市、尾張富士大宮浅間神社で行われる「石上げ祭」は、尾張三大奇祭の一つに数えられ、毎年8月の第1日曜日に、犬山市域、近郊各地から人々が集まって尾張富士に石を献ずる祭りです。昔、尾張富士が隣の本宮山より低いことを嘆いた御祭神(木花開耶姫命)の神慮にこたえようと村人達が、大石を山頂に積み上げたのが始まりといわれています。山頂に石を積み「石上げ」は朝から行われ、夜は火をつけた松明を振り回しながら山頂から麓まで降りる「火振り」が行われます。祭りの起源は近世末期と推定され、詳細は不明ですが、石上げは大正時代に盛んになったこと、火振りは寛永時代には行われていたことなどがわかっています。



三重県 亀山市 関町の伝統芸能 関の山車 (大裏・三番町・四番町・木崎)

「関の山車」は東海道関宿に元禄年間から伝わる祭りで、江戸後期には16基もの山車があり、横幕・見送幕・提灯を豪華に飾りつけて華美を競い合いました。山車の台車から上が回転する構造となっており、巡行時の辻々などで勢いよく回転させることが特徴の一つにあげられます。狭い宿内の家並みを山車が巡行する様から、「限度いっぱい」という意味の「関の山」の語源となつたと伝えられています。現在は木崎町・大裏(北裏)町・中町三番町・中町四番町の4基が保存され、関神社の夏祭りとして例年7月下旬の土・日曜に開催されています。



三重県 熊野市 どぶろくの宮 大森神社 熊野市育生町に伝わるどぶろく祭り

どぶろく祭の舞台となる大森神社は、熊野市街地より車で約40分の静かな町です。この町に伝わる大森神社どぶろく祭りは起源が建保元年(1213)と伝承されています。祭りは毎年、どぶろく用の米づくりから準備が始まります。「当屋」が決定し、神社の清掃や祭り用の餅つきなど、祭りに向けた活動が本格化します。11月23日には「当屋」の清めの水浴びが厳かに行われ、翌23日の大森神社の例祭(別名どぶろく祭り)を迎えます。祭り当日、朝9時半頃にはいよいよ「当屋」の立ちです。10時頃には神事が始まり、この後、どぶろくが参詣者に振舞われます。静かな山里が賑やかなふれあいの里に変身します。



三重県 伊賀市 修正会を守る人々 正月堂修正会

三重県の西北部、伊賀市島ヶ原(旧島ヶ原村)に天平時代から連綿と続く歴史を支え、培って来たものに観音提寺正月堂の修正会があります。修正会は、県無形文化財に指定されており、毎年2月に盛大に行われ、大餅会式という庶民的な行事と、達陀をはじめとする厳肅な儀式が合わさったユニークなものです。五穀豊穡と除厄を祈り、島ヶ原では「せきのと」と呼ばれて親しまれ、クライマックスの大餅練り込みでは、「エトウ、エトウ」のかけ声とともに、頭屋が正月堂に練り込み、大餅、節句盛りなどを供えます。荒行といわれる「達陀行法」では、火天と水天の舞が奉納されます。大陸からの伝来を思わせる様々な行法は、見るものの心を捉えて止みません。



滋賀県 東近江市 湖東物語

近年の急激な生活様式や社会構造の変化に伴い、土地の特色である伝統的な行事や習慣は廃止、簡略化されたりして、昔の農村の暮らしを知る事は難しくなっています。この映像記録は、東近江市の旧湖東町地域の伝統的な行事を中心に農村の一年間と地域の歴史と文化がわかるようにまとめたものです。厄除け大祭(池庄)、神明神社の勧請縄作り(南清水)、初亥(平柳)、節分、初午(平柳)、春祭り(北花沢・平松)、春日神社の大祭(中岸本)、春日神社の大祭(小八木)、神明祭礼(南清水)、八幡神社の春季例大祭(小田苑)、押立神社の大祭「ドケ踊」、奉納相撲(池庄)、山の神(清水中)、山の神例祭(大清水)、山上神社例祭(湯屋)、春日神社の霜月祭(小八木)、長村鋳物師と梵鐘作りの技法、匠の伝統・今在家の宮大工、歴史民族資料館へのいざないの19編をもって湖東物語として再構成しました。



京都府 福知山市 御勝八幡神社大祭 上野祭の紫宸殿田楽、天座の田楽、下野祭の三岳練込み太鼓

御勝八幡宮は、福知山市北部地域、旧佐々木荘下山保(金山郷)の近郷6ヶ村の総鎮守です。この神社では25年に1度大祭が行われ、上野祭の紫宸殿田楽(京都府登録無形民俗文化財)、天座の田楽(京都府登録無形民俗文化財)、下野祭の三岳練込み太鼓(福知山市指定無形民俗文化財)などの芸能が奉納され、中世にさかのぼる惣の祭礼の面影を今に伝えています。それぞれの田楽はピンササラ、太鼓、笛方があり、田楽の形態が良く残り、芸能を同わせる貴重な伝承であり、古くは大正時代から学術的にも注目されています。



兵庫県 養父市(旧関宮町) 葛畑座農村歌舞伎 復活公演

平成15年、38年ぶりに復活した農村歌舞伎葛畑座のビデオです。養父市葛畑は兵庫県の北部に位置し、国指定重要有形民俗文化財「葛畑の舞台」(芝居堂)のある場所です。少子・高齢化のすすむ葛畑で、この文化財を活用した「村づくり」をすすめています。今回この復活までの歩みを映像に残しました。是非ご覧ください。



兵庫県 たつの市 榎八幡神社獅子舞

数百年来続いている毎年10月20日の例祭には、氏子16自治会が交代で当番となって、伝統の神事獅子舞を自治会全員で賑やかに奉納します。この獅子舞は二人の獅子使いが獅子頭にコタンという胴衣をつけたものを被って、花笠、綾などを持った子役とともに、笛、太鼓、拍子木などの囃しに合わせて、種々の所作表現をしながら舞踊するもので、可憐優雅なものや軽快勇壮なもの、ユーモラスで曲芸的なものなど多彩です。なかでも継獅子は獅子も童子もともに人の肩の上に乗り、立ち上がってアクロバティックな演技をするもので、「榎の継獅子」として特に有名です。榎八幡神社獅子舞の舞技は、郷土芸能としての真価が認められ、兵庫県無形民俗文化財の指定を受けています。



鳥取県 鳥取市(旧用瀬町) 江波の三番叟

毎年10月22日(最近10月第3日曜日)江波神社祭礼当日に、境内にある回り舞台上で上演されます。以前は歌舞伎が夜通し演じられ、三番叟は前座に祝儀として舞ったほか、病氣平癒、安産祈願などに願立てをして舞いました。歌舞伎は、昭和37年(1962)を最後に演じられなくなりましたが、三番叟は200年余り、今日まで一度も休むことなく、奉納の舞として続いています。この舞は、能の式三番叟をもとにしたもので、翁の姿をした神が天下泰平、五穀豊穡を祝います。口上の中には、めでたい言葉が多く入っており、格式の高い舞とされています。



島根県 松江市 ホーランエンヤ

「ホーランエンヤ」の名で親しまれている「稲山稲荷神社式年神幸祭」。松江の初代藩主、松平直政公が出雲に入国して10年目に国内が大凶作の危機にみまわれ、城山稲荷神社の御神霊を阿太加夜神社にお運びし、五穀豊穡を祈ったのが始まりです。ホーランエンヤは日本三大船神事の一つとも言われ、五地区から繰り出す権伝馬船を先頭に、神楽船・神輿船・供船などの船行列が延々と1kmにわたって穴道湖、大橋川、中海を彩ります。歌舞伎風の衣装で着飾った踊り子や権漕ぎの若い衆が唄い踊る権伝馬船はこの祭り最大の呼び物で、色とりどりの旗、幟をなびかせ、豪華な時代絵巻となって見る人々を魅了します。



島根県 奥出雲町 大炭窯築造製炭技術 ~ 製鉄用製炭従事者 “山子” の技術伝承 ~

島根県の飯石・仁多・大原の三郡からなる奥出雲は、半島部や平野部にはない独特の文化をもっていました。これは鉄製産がもたらす恵によるものとも考えられています。鉄は朝鮮半島から製鉄の技術が伝わり、弥生時代から古墳時代にかけて技術が急速に進歩し、農耕用具として生産されました。武器として、地域勢力の命運をもつものでした。この重要な鉄の生産の背景には、鉄製にとって化学的に良質の磁鉄鉱を含む花崗岩が、この地方に広く分布していたこと、好適な水利条件が存在し、豊富な木材(木炭)の確保が容易であったことがあげられます。現在では、炭焼き風景はめったに見ることができなくなりました。奥出雲町においては、現在国内唯一の伝統的製鉄技術である「たたら」の操業をし、鉄(玉鋼)を生産しています。



島根県 隠岐の島町(旧五箇村) 隠岐古典相撲大会 島後久見神楽 牛突

【隠岐古典相撲】隠岐の古典相撲は約300年前の神社改築の相撲奉納が始まりと伝えられています。以来、神社の遷宮など慶事に開かれることから「宮相撲」とも呼ばれています。一時は途絶えていたが昭和47年有志が「隠岐古典相撲」として再興しました。
【島後久見神楽】島後久見神楽は伊勢命神社を中心に久見地区民が伝承したもので、本祭りの時は7月26日、裏祭りのときは7月25日、翌日の夜明けまで伊勢命神社の神楽殿で行われます。
【一夜猿牛突大会】隠岐の牛突は780年の歴史があるといわれ、由来は後鳥羽上皇が隠岐へ配流になられた際に、里人が上皇の御心をお慰めするために御覧に入れたのが始まりだとの伝説があります。豪華な化粧回しを付けた突牛が東西別に土俵入りを行います。塩を振る先払いに導かれて、入場する突牛は場内のかっさいを浴びます。



岡山県 高梁市(旧備中町) 備中町の渡り拍子

高梁市備中町の秋は、鉦や太鼓のにぎやかな音で彩られます。そう、「渡り拍子」です。「渡り拍子」は御神幸の供奉楽として各地区の氏神で、秋の取り入れが終わった11月上旬からほぼ20日間にわたって行われます。この地では「楽を打つ」が「拍子打ち」「楽」などと呼んでおり、秋祭りを彩るものとして、なくてはならぬものとなっています。起源としては神功皇后が三韓征伐から凱旋されたときの道中楽であるとか、朝鮮から貢ぎ物を献上に来た使者の道中楽であるとか聞き伝えられています。備中町の秋はそれはそれはにぎやかなのです。六百年の歴史を誇るといわれるこの「渡り拍子」勇壮な舞の向うに、きっと歴史のロマンが感じ取れることでしょう。



岡山県 真庭市(旧川上村) ひるぜんのがま細工

岡山県北、蒜山(ひるぜん)地方に伝わる「がま細工」は、650年の歴史があるとされます。がまの保水性・防水性に優れる特性を生かして、背負いかご、手提げかご、雪靴などの実用民具が冬、雪に閉ざされた農閑期に作られてきました。しかし、後継者不足などで年々衰退し、その存続が危ぶまれたが、数名の製作者によって「川上がま組合」が設立され、その技法の伝承と振興に力を注いでいます。昭和57年岡山県郷土伝統的工芸品の指定、平成16年度第4回むらの伝統文化顕彰を受賞しています。また、平成14年には「ひるぜんのがま細工」の製作技法を材料採取から製品まで詳細に記録に残すビデオ、DVDを製作しています。



広島県 呉市(旧倉橋町) 倉橋の船大工 ~ 厳島神社・御座船建造記録 ~

呉市倉橋町は、広島県の最南端にあり、瀬戸内海の中程に位置しています。古より造船の街として栄え、平成2年「海と島の博覧会」の年に、万葉集の故事にちなんで、実物大の遣唐使船を建造しました。平安時代には厳島神社に、平清盛が京の船管弦を伝え、現在では日本三大船神事の一つとして、管弦祭として続いています。近世には、廻船の発達と造船技術が相まって内海有数の造船地として、諸大名の御座船をはじめ、弁財船等の建造に栄えました。現在は、大正12年に「管弦船御用講」を結束し、御座船の奉納行列を伝承しています。しかし木造船の衰退と共に、船大工の高齢化も進んでおり、将来に継承するため、記録として残すものです。



広島県 庄原市(旧東城町) 塩原の大山供養田植 ~ 牛と生きる山里の祭礼 ~

伯耆大山を中心とした、伯耆・出雲・美作・備中北部・備後北部一帯の地方は、数百年のむかしから、牛馬安全の神・大山智明大権現(通称、大仙さん)への信仰がさかんであった地方です。この東城の地方でも、旧村単位でのどの地区にも、高い山の上に大仙社が勧請され、毎年春や秋には、大仙祭りが賑やかに行われていました。そのなかでも、とくに、塩原・内堀・栗田にまたがる多飯が辻山(1040m)の大仙社は、塩原の多飯山医王寺の鎮守の社でもあり、伯耆の大山寺の直轄の御免拝所としての格式をもって、近隣近郷の大山信仰の中心となっていました。大山供養田植は、定期的に毎年行われる春秋の大仙祭りとは別に、随時、奇特な施主が主催して、不慮の死にあった牛馬の霊を供養し、現在飼育している牛馬の安全と、五穀豊穡・家内安全を祈念する、大規模な祭りで、田植おどり、供養行事、しるかき、太鼓田植、お札納めの五行事で構成されています。



広島県 海田町 火ともしまつり 出崎森神社 熊野新宮祭礼獅子舞

【火ともしまつり】出崎森神社
当社が筑前の宗像神社より勧請されたとき、村人がたいまつを灯して船を出迎え導いたことから始まったと伝えます。その神事の準備から実施、コースについて収録しています。
【熊野新宮祭礼獅子舞】
菓師町の人々が、船越町竹浦より伝承させたと伝え、明治以降に頂戴(ちょうさい)とともに、熊野神社秋祭りの主役となっています。その神事の一日の状況を映像に残し、参考とします。



山口県 宇部市 大樹の舞 楠町の岩戸神楽舞

岩戸神楽舞は、山口県宇部市万倉二道祖の御伊勢山皇大神宮に奉納するため、約240年前に始められました。毎年12月5日の夜、約4時間かけて奉納されます。この神楽舞は、太鼓・笛・鉦の五調子囃子に合わせ10種12座を舞います。最初に神楽舞(一～三番)・三宝の舞を舞い、天井に吊るした天蓋の操作を挟み、榊の舞・鉦の舞・剣の舞の順に続きます。次に祝詞の舞で祝詞を奏上し、そして天の岩戸の神話にちなんだ岩戸の舞・姫の舞・鬼の舞の三座が続き、弓の舞で終わります。二道祖の神楽舞は、原則1m四方の限定された範囲内で舞います。岩戸神楽舞としては質朴な扮装で、採物の舞の多いことが特徴とされ、古式を今に良く伝えていきます。



山口県 岩国市(旧美和町) 神楽舞う里 山代白羽神楽と山代狂言神楽

古来より山代地方(山口県東部の北山間部)には数多くの神楽が伝えられており、これらを俗に「山代神楽」といいます。これらははじめに神事的な太夫舞、後に鑑賞的な要素をもつ仮面舞を行います。石見神楽(出雲流の神楽)の流れをくむ安芸系の神楽が強く影響しているといわれています。しかし、創始について正確なことは明らかになっていません。この作品は「山代神楽」の中から、山口県指定無形民俗文化財である「山代白羽神楽」と岩国市指定無形民俗文化財である「釜ヶ原神楽」を取り上げ、伝承活動に取り組んできた各地域の歴史・風土・特色と、それぞれの神楽の演目を紹介した作品です。



徳島県 阿南市(旧那賀川町) 原の獅子舞

文化11年(1814)の文書には、すでに「原村獅子」との記録があり、原の獅子舞の歴史は約200年前からあることが分かります。大正時代以降、獅子舞は、2回の中絶及び復活を経たが、現在は後継者不足のため、祭りでの奉納は中断されています。獅子舞は、三栗の八幡神社の秋祭り(オオマツリ)に出ています。オオマツリには、平島村の12のムラからダンジリが寄ってきており、獅子は、悪魔払いの意味でダンジリの先頭を進んだが、オオマツリにおける獅子舞の披露は、必ず最後でした。早い時間に祭りの花形である獅子舞をすると、見物客が皆、そこで帰ってしまうからです。原の獅子舞は、周辺各地にも伝えられており、羽浦神社、木岐(海部郡)の八幡神社の獅子舞も原から伝えられたものだといえます。平成11年には、那賀川町の無形民俗文化財に指定されています。



徳島県 海陽町(旧海南町) 海南町の伝統芸能・行事 自然と文化が響く町 ~ 徳島県・海南町 ~

海南町では、人々が長年の生活の知恵によって創りだした民俗芸能や年中行事を見直し、後世に何を残すべきかについて検討し、このビデオの制作に取り組んで参りました。このビデオには、仕事歌として、(木出し歌、もみすり歌、梅づくし) 祝い歌として、(えびす舞、大黒舞、伊勢節) 子守歌として、(大里の子守歌、子守歌) わらべ歌として、(巡礼数え歌、いちもん歌) 子どもを中心とした行事として、(亥の子歌、虫送り行事) 年中行事として、(各地域で行われる盆踊り、八幡神社大祭、左義長) を収録しました。これら、今に伝わり何とか残った伝統芸能・年中行事を土台にして、更に新しい文化の創造をめざしております。



香川県 高松市(旧牟礼町) 牟礼・庵治 石工の技

屋島の東方、高松市牟礼・庵治町から産出する硬くてきめ細かな花崗岩は、日本を代表する高級石材であり「庵治石」として広く知られています。映像は、この庵治石の持つ独特の美しさやそれを際立たせるためのすぐれた石工の技とその習俗、又、高松城築城に始まると言われる近世以降の石材利用の歴史等を紹介しています。なかでも「石工の技」については石工さんの協力を得て、採石や加工に機械が導入される以前、「手掘り手細工の時代～明治前期～昭和前期」頃の技術を再現しています。そこで使われている道具類も石の民俗資料館が収集、所蔵している当時のものです。石材としての花崗岩の機械化以前の採石・加工のすぐれた石工の技術とそこで用いられた道具類の概要について知っていただけることでしょう。



香川県 綾川町(旧綾上町) よい米どころ ~ 綾上町 ~ 米づくりとともに生きる伝統文化

四国香川の中南部に位置する綾上町は、「綾の川辺のよい米どころ、龍王山より流れ清き、綾の川辺の大狭田大狭田、八束穂みのる村あり山田、千年このかた知られしところ、人はむつびて生業はげみ」と歌われるように、昔から米作りと共に様々な地域文化が育ってきた地域です。とくに季節々の農作業と祭りは関係が深く、福の宮神社の春祭りから始まり、お田植え祭り、念仏踊り、松熊八幡宮の秋祭り様々な祭りが催されます。このビデオでは私たちの生活様式が大きく変化するなか、米作りとそれに伴う様々な祭り文化を大切に守っている町民の姿を描いています。



愛媛県 八幡浜市 五反田の柱祭り

五反田の柱祭りの由来は、戦国時代、約400年前にさかのぼります。戦国時代に五反田元井の山にあった元城に仕える山伏・金剛院が九州に修行に行っている最中、土佐の長宗我部氏が元城を攻めてきました。金剛院は急ぎ元城に帰還したが、味方に敵方と間違えられて射られてしまいました。元城は天正12年(1584)に落城したが、その後五反田に悪病が流行し死者が多く出ました。これは金剛院の祟りであるに違いないといって、彼の霊を供養するために柱祭をはじめたと伝えられています。祭りは毎年8月14日の夜に開催されます。五反田川の河原に高さ20メートル余りの柱を立て、柱の先に漏斗型に編んだ麻木の籠と笠飾りを取り付けられます。各部落から集まった青年達によって長さ1メートルほどの縄に結んだ松明を籠めて放り投げます。籠の中に松明が入り燃え上がるまで続けられます。柱を中心に美しい火玉が間断なく夜空に尾を引いて乱舞する光景は壮観です。これは一種の火祭りで、伝承奇習の年中行事として多くの人に親しまれています。昭和40年には県の指定文化財となり、昭和50年からは場所を五反田河原から公園グラウンドに移動して行なっています。



愛媛県 大洲市 青島の盆踊り

寛永16年(1639)、播州赤穂坂越村から移住してきた人々によって踊り継がれてきた「青島の盆踊り」。8月13日は魚の供養と大漁を願う賑やかな「大漁踊り」。8月14日は故郷赤穂を偲び「赤穂四十七士」の装束で踊る「亡者踊り」。勇壮華麗な衣装、踊りの振りや口説き等、昔の姿がほとんどそのまま今日に伝えられてきた、愛媛県指定の無形民俗文化財です。



高知県 土佐町 土佐の祭り ~ 土佐町南川・百万遍 ~

高知県土佐郡土佐町南川の大谷寺に古くから伝わる「百万遍」という祭りがあります。これは、毎年土用に入って初めての日曜日の午前0時から日の出まで、午後1時から4時頃まで行われるもので、地域の五穀豊穡、家内安全などを祈念する祭りで、数珠繰りという独特の行いがあり、県内・外を問わず非常に珍しく、県下では最も規模の大きいものとして知られています。しかし、数珠繰りに参加する者は南川地区住民とその出身者の男子に限られているため、過疎化・少子化・高齢化が進むなか、南川地区の住民だけで「百万遍」を行うことが難しくなっています。



福岡県 福岡市 博多祇園山笠行事

平安時代に始まった京都の祇園御霊会に起源をもつ、国内有数の祭りです。櫛田神社の社伝では、鎌倉時代に承天寺の開山聖一國師が、疫病退散のために施餓鬼棚に乗り、博多の町に聖水を振りまいて回ったのが始まりと伝えています。博多人形で飾りつけた10mを越す飾り山笠を穿いた時代もありましたが、電線を切断するの別で昇山を作るようになりました。現在の山笠行事は7月1日から15日まで行われています。7月15日午前4時59分、太鼓の合図とともに博多の町を全力疾走する追山は勇壮そのもの。櫛田神社境内には飾り山笠が常設展示されています。



福岡県 行橋市 今井祇園祭

福岡県指定無形民俗文化財「今井祇園行事」は、九州における祇園祭の原型を留めた貴重な祭礼行事です。今井津須佐神社(福岡県行橋市大字元永所在。通称「今井の祇園さま」)に、天下泰平、五穀豊穡、無病息災、厄除開運を祈願して、行橋市大字今井、大字元永を中心として各所で様々な行事が行われます。「連歌」「山」「八ッ撥」の行事がありなす豊前地方の夏の風物詩であり、とりわけ大祭二日目の夜は「夜祇園」と呼ばれ、古くより豊前地方の人々に親しまれてきた夜市で賑わいます。この記録映像は、平成12年度に実施された民俗調査において撮影編集されたもので、平成12年7月15日～8月3日(大祭は8月1、2、3日)の祭礼期間における各行事を収録し、貴重な祭りの概要を紹介したものです。



福岡県 豊前市 豊前市の岩戸神楽

豊前市の岩戸神楽は現在六つの保存団体により伝承されています。その起源は古く中世の頃には既に成立していたと考えられますが、文献などでその内容が確認できるのは江戸時代以降です。演目は俗に豊前岩戸神楽三十三番といわれますが、もともとはそれ以上の演目があります。内容としては抜いの舞を中心とした「式神楽」と、出雲神話を題材とした「奉納神楽」に大きく区分され、その特徴は出雲系の神楽を中心としながら伊勢系の「湯立神楽」を最大の特徴とし、さらにその「湯立神楽」は求菩提山で隆盛を誇った山岳修験文化の影響を強く残していると言えます。その見所を示せば、式神楽の花神楽、笠神楽、弓正護、地割などは神楽本来の優雅な舞で、見る者を厳肅な雰囲気させてくれます。岩戸開きはオーソックスな演目ですが、神々の力感あふれる舞は、私たちが古の世界へと誘うがごとく問いかけてきます。出雲神話にもとづく(御先)神楽、大蛇退治や神迎え、アクロバットの要素を持つ剣神楽、盆神楽なども楽しい演目です。そして何と言っても圧巻は湯立神楽です。高さ10mにも及ぶ斎針と呼ばれる柱に登る鬼は見る者の度肝を抜き、その後に行われる火渡りは修験者の気迫そのままに私たちを圧倒します。毎年9月から12月を中心に市内60ヶ所余りの神社で奉納されます。



福岡県 矢部村 八女津媛神社の浮立

【八女津媛伝説】
「この地方に女神あり。その名を八女津媛といい、常に山中におる。」これは、日本書紀に記された「八女」の名の起こりです。四世紀半頃、景行天皇が八女の地に巡幸された折に、当時の水沼の県主「猿大海」が、奉上したといわれます。
【八女津媛神社の浮立】
この八女津媛を祀った神社が福岡県八女郡矢部村大字北矢部字神ノ窟にあり、中世期の創始と推定される遠い昔から今日まで、「八女津媛神社の浮立」として、ながく村人の手によって守り伝えられています。昭和51年に福岡県指定無形民俗文化財に指定されています。



佐賀県 唐津市 唐津曳山

唐津くんちは、唐津神社の秋季例大祭で、現在11月3日を中心に行われています。祭礼は、鉦、太鼓、笛の囃子もにぎやかに、曳山と呼ばれるつくり山笠が、はっぴ姿の氏子によって市中を曳きまわされます。この曳山は、古くは宝暦年間に傘鉦山が奉納されたといわれ、現在のものは文政2年(1819)につくられた刀町の赤獅子から明治9年(1876)の水主町の鯨まで14台で、曳山囃子につれて御神幸の行列に供奉します。祭りは2日の宵山、3日の御旅所神幸、4日の町巡りまで行われます。宵山は、提灯に飾られた曳山が町内を一巡します。3日の西の浜明神台の砂浜へ曳山の引き込みや引き出しは圧巻です。4日は町巡りの後、曳山展示場に納められます。



佐賀県 武雄市 ふるさとのまつり 高瀬の荒踊り

荒踊りは旧武雄領内に伝承される民俗芸能で、その起源については諸説あるが、一説に享禄3年(1530)、島原の有馬氏が武雄を攻めて住吉城(杵島郡山内町)に迫った時、武雄領主の後藤純明が夜襲によってこれを破り、その戦勝祝いとして足軽たちが即興的に踊ったのが始まりといわれています。武雄の荒踊は、中野・高瀬・宇土手の3団体が昭和52年「武雄の荒踊」として国重要無形民俗文化財の指定を受けました。高瀬の荒踊りは、毎年9月23日松尾神社に奉納されています。作品は練習風景と奉納当日を撮影したものです。高瀬地区の荒踊りは素朴で力強いのが特色です。



佐賀県 上峰町 舞は天を衝く 佐賀県上峰町米多浮立

佐賀県には浮立と呼ばれる民俗芸能が広く分布しています。浮立は、農民の素朴な願望と感謝を表現した伝統芸能です。上峰町前牟田(米多)地区に伝わる米多浮立は、天衡舞浮立といわれ、三人の青年が黒装束に身をつつみ、巨大な「天衡」をかぶって舞う、他の浮立にはない特色をもっています。記録によって、江戸時代中頃にはすでに当地にて奉納されていたことがわかっています。太平洋戦争中に一時途絶えましたが、戦後復活、昭和46年には保存会が結成され、今日に至っています。現在は、二年に一度、10月下旬の土、日曜日に地区の秋祭りとして、老松神社と若宮神社に奉納されています。



長崎県 平戸市 度島の盆ごうれい

「度島の盆ごうれい」は、長崎県平戸市度島町に江戸時代から伝わる民俗芸能で、伝承によると寛文10年(1670)に島内の平和と豊年、豊漁を祈願して起こったと伝えられています。旧暦の7月16日、総勢200名以上の参加者が大行列の形態をとり、幟組・棒組・須古踊組・奴踊組・子踊組に分かれ、島内の神社仏閣を中心に奉納が行われます。盆ごうれいの象徴である幟は、御霊が宿る最も神聖なもので、見せ場である「吹き渡し」「逆起し」の演技の成否がその年を占うとされ、幟さしの若者の力と技と心意気が求められるものです。これほど昔ながらの姿で保存伝承されているのは、数多くの伝統芸能をかかえる長崎県内でも他に例がありません。



長崎県 松浦市 志佐精霊流し ~先祖を送る心を編む~

長崎県北部の松浦市志佐町では、毎年8月15日のお盆に故人の御霊を送る精霊船が川面に浮かびます。精霊流しの起源は定かではありませんが、鎌倉時代にさかのぼるとも言われています。当時から精霊船は、ほとんどが藁で製作されていたが、現在では長い藁を手に入れることも難しくなっています。しかし、志佐町の浦地区立町では、伝統的な藁を使っての精霊船が作られています。藁は本来、水を通しやすいためしっかりと隙間がないように編んでいくことが大切で、この技術を持つ人も今では少なくなっており、若手にその技術を伝承されているところでは、最初は長い縄だったものがだんだん太く、そして丈夫になって船の形ができ、飾り付けをまって完成します。15日の早朝から、一般の人々に庭見せが行われます。夕方、辺りが薄暗くなった頃、人々が集まり、故人を送り出す家々は供え物を藁の精霊船に乗せます。庭見せが終わった5地区の精霊船は、多くの人たちに見送られて送り出されます。そして、志佐川の川面の光の中にゆっくり入り、火花が上がる中、精霊船はゆっくりと流れ去ります。志佐町の精霊流しは、故人を送る心を伝えてゆく、次の夏も、その次の夏も……。



熊本県 八代市 植柳盆踊り 八代神社(妙見宮) 祭礼の獅子舞楽 花奴

【植柳盆踊り】江戸時代初期頃から始まったものといわれています。黒い頭巾をかぶり白い着物に黒い帯を締めるいでたちから「亡者踊り」とも呼ばれます。楽器を使わず、口説き歌に合わせて踊ることを特徴としています。【八代神社(妙見宮)祭礼の獅子舞楽・花奴】八代神社祭礼は1300年前、中国から妙見神が亀蛇に乗り海を渡り八代に上陸したという故事に基づき江戸時代中期に始まりました。祭礼の行列は八代城下の塩屋八幡宮から八代神社を目指しますが、その先頭を勤めるのが、獅子舞楽これに続くのが花奴です。獅子舞は元禄時代長崎の「おくんち祭り」の羅漢獅子舞を取り入れて始まり、花奴は1752年に初めて奉納されたといわれています。



熊本県 南関町 大いなる遺産を守り継ぐ

この映像は、地域の伝統芸術等(祭り、伝説、神話、民話、伝統芸能)を映像に記録、保存するとともに、地域伝統芸術等の発表の場等としてのイベントを開催することにより、地域住民の新しいふるさとづくりへの取組の向上を目的として作成しました。この中に収録されている神楽、古代楽、人形芝居は、南関町に古くから残る伝統芸能で、地元の方により受け継がれています。後継者がいなくなっていくなか、これを絶やさないために活動している姿を皆さんに見ていただくことで、関係者及び町民の方の関心が高まることを期待しています。特に、南関町のイベントや子供たちの練習している姿は是非ご覧ください。



熊本県 氷川町(旧宮原町) 早尾のスッキョン行事

氷川町の早尾地区に今なお伝承されている成人式の奇習のことで、特徴として、大きな男性性器の模型が使われています。スッキョンの名称は、儀式の中で使われるかけ声から出てきたものですが、転じて成人式を呼ぶこともあり、また、男性性器の模型を示していることでもあります。毎年その年の「ハツゴモリ」の日(1月11日)におこなわれる事になっており、この儀式に参列するものは、現在では消防団に入団する者となっていますが、古くは村の大人の組入りをする者についておこなわれたと言われていました。この儀式は、村の古老の中から選ばれた神主が司祭し、村役が立会いすることになっています。



大分県 豊後大野市(旧朝地町) 深山流岩戸神楽

大分県指定無形民俗文化財「深山神楽」を始めとする深山流岩戸神楽は、御嶽流・浅草流と並ぶ大野系神楽で、江戸中期より深山八幡社に伝わり、明治以降に急速に民間に流行しました。豊後大野市朝地町を中心に大野地方・直入地方に広く分布しています。本作品では、「深山神楽」の保持団体であり本宮の神楽座である深山八幡社神楽座と、有志により結成され、古老に教えを乞い深山流の原形を求めて研鑽を積んできた朝地神楽保存会の2団体による競演を収めています。全三十六番のうち十五番、再現できる限りの番組を収録した貴重な映像記録です。



大分県 豊後大野市(旧緒方町) 緒方町五千石祭

緒方五千石祭は、もともと農作物の収穫を祝って行われる各神社の秋祭ですが、現在は緒方地区の15社の神輿が一斉に集う連合祭のかたちで盛大に行われています。毎年9月23日、会場である緒方小学校校庭で、早朝の神輿巡幸から夜の還御までさまざまな祭礼行事が繰り広げられます。15基の神輿が会場内に安置されずらりと一列に並び姿は絢爛かつ荘厳で見ごたえがあります。また、神幸行列では各社の獅子太鼓・獅子舞・白熊練りが賑やかに催され、大分県指定無形民俗文化財である御嶽流緒方神楽や、選択無形民俗文化財の千盆搦も奉納されるなど、この日は緒方の地に伝承する郷土芸能をまとめて楽しむことができる貴重な機会でもあります。



大分県 姫島村 姫島盆踊り

姫島の盆踊りは、鎌倉時代の念仏踊りから発展したものとわれ、伝統踊りと毎年変わる創作踊りなど約60種類程度あります。伝統踊りには、キツネ踊りをはじめ、アヤ踊り、銭太鼓、猿丸太夫などがあり、また創作踊りも次々と生まれ、ユーモアや趣向を凝らした衣装などで見る人を楽しませてくれます。特に8月15、16日が賑わい、踊り手は中央広場と各地区にある盆坪を回って踊り歩きます。



宮崎県 ^{みやこのじょうし} 都城市 ^{はなび} からくり花火

都城市上水流町の科長神社には、古くから毎年7月29日に六月灯(夏まつり)が行われ、その最後には、江戸時代から伝わるといふ「からくり花火」が奉納されます。からくり花火とは、竹筒に調合した花火を詰め、点火し、その噴射により綱を伝わらせる「仕掛け花火」です。現在、からくり花火は地区の保存会のメンバーが伝承しており、奉納日が近づくと花火の製作にとりかかります。およそ40本の花火をすべて手作りで仕上げています。昔から製法が漏れないように、作り方などは口頭で伝えられています。からくり花火の綱は、立木に2.5mから4.5mの長さで6mmの麻綱を「くも」の巣の様に張り巡らせます。この作業が重要で、時間をかけて丁寧に進め、約6時間で全ての綱が張りあがります。そして、花火が始まる頃、境内は多くの人で埋め尽くされ、情緒ある花火に人々の歓声が響き渡ります。からくり花火は五穀豊穡、家内安全、無病息災、延命長寿、厄払いを祈願するもので、地区の重要な行事となっています。



宮崎県 ^{のべおかし} 延岡市 ^{しるやま} 城山かぐらまつり

この作品は、2004年11月7日宮崎県延岡市にある延岡城跡で行われた、「第8回城山かぐらまつり」を収録。1997年、神楽に焦点をあて保存伝承活動を通して地域交流、青少年健全育成、地域興し等に繋げようと、宮崎県延岡市(伊形・大峡・尾崎・鹿狩瀬)、同北川町(川坂)、同北浦町(歌糸)、同北方町(椎畑・美々地)、大分県佐伯市蒲江(竹野浦・第2回より参加)の保存会が連携して開催。毎回、県内外の保存会を招聘し県境を越えた広域的な活動となっています。まつりは、「千人殺し」と呼ばれる南九州最大の石垣を借景に行われ、荘厳な雰囲気の中で山の神楽や海辺の神楽など多種多彩な神楽を一同に観ることができます。また、会場では地場産品販売や餅まき・ぜんざいなどの振る舞いも行われ、秋の風物詩の一つとして定着しています。



鹿児島県 ^{くしきのし} いちき串木野市(旧市来町) ^{いちき} 市来の七夕踊

この踊りの起源は約400年前に遡り、島津義弘公の朝鮮の役での活躍を称えたものとして踊られたのが始まりと一般に伝えられています。その約90年後、金鐘寺住職の捨範叟と地頭の床瀬到住が大里水田への用水路建設を実施し、天和4年(1684)に用水路が完成、大里水田開拓を記念して再び踊り始められました。大里地区出身者は、必ず一度は太鼓を打たないといけないと言われ、県外に出ている者も毎年この踊りに参加する為に帰省します。厳しい戒律のもと、約300年もの間踊りつづけられた国指定重要無形民俗文化財です。現在も8月7日に近い日曜日に開催され、太鼓踊りを中心に牛・虎・鶴・鹿などの作り物や、大名行列、琉球王行列、薙刀行列、甲冑行列などの行列ものが繰り出します。踊る場所も数多く、大里地区の様々な神や先祖霊に踊りを奉納することにより豊作を願っています。



鹿児島県 ^{みなみ} 南さつま市(旧金峰町) ^{たかはしじゅう} 高橋十八度踊り

毎年8月22日、子供が水難にあわないように願って、水神祭りとして行われます。大ガラッパ「かっぱ」に扮した青年は、シュロの皮で作ったお面を被り、寝具・寝巻き・かいまきをまとい、公民館から玉手神社に向かいます。途中神社でも、子供や観客に担いだ笹などで悪さをしたり、小さな子供などは、追っかけて捕まえてカマスの中に入れてしまいます。よっかぶいは、直ぐそばを流れる万之瀬川支流、堀川に住む水神と言われ、五穀豊饒と水難防止を願い、300年以上の伝統行事です。よっかぶいとは、「寝具かぶり」の方言で、それは、カッパに化けた青年達や祭りの名前になっています。



鹿児島県 ^{うけんそん} 宇検村 ^{ぎょうじ} シバサシ行事と八月踊り

宇検村阿室集落(奄美大島)で行われている「シバサシ」行事関連と併せて、村内各集落の伝承芸能の「八月踊り・唄」を紹介します。

奄美の八月踊り・唄は口承文化のため、近年その伝承が難しく、消滅の危機にあります。そのような中、宇検村阿室集落では、昔ながらの「シバサシ」行事がしっかりと受け継がれています。中でも「ノロ」に関係する、「シバサシギン」(神ギン)行事は、民俗文化として、学術的にも貴重なものです。



沖縄県 ^{なごし} 名護市 ^{やぶ} 屋部の八月踊り ^{はちがつおど} ~継承される祭り~

140年の歴史をもつ屋部の八月踊りは、沖縄県の無形民俗文化財に指定され、沖縄を代表する民俗芸能の一つです。「八月踊り」は、旧暦7月中旬の盆前後の「面配り」の日から始まります。面配りとは、その年の八月踊りの演目と出演者を決めることです。また、この日に、「屋部踊り団」が結成され、八月踊りの稽古から準備、本番、慰労会にいたるまで全部取り仕切ります。八月踊りは、「仕込み」「正日」「別れ」の3日間行われ、夕方から舞台で舞踊、狂言、組踊等約30演目が夜遅くまで上演されます。